

**注意！**

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。  
■文中で旧 URL (<http://www.nougyou.kitakamiwate.jp/agri/>) を記載している場合、新 URL (<http://i-agri.net>) に読み替えてください。

平成14年1月発行

# 病害虫防除技術情報 NO.13-2

岩手県病害虫防除所

## リンゴ斑点落葉病のポリオキシシン耐性菌分布とポリオキシシン剤休止後の影響及びロブラール剤の効果

りんご斑点落葉病のポリオキシシン耐性菌は、県内に広く分布している。ポリオキシシン剤の使用を中止してから、2～3年経過した園地でも耐性菌率が依然高い園地が散見された。ロブラール剤に対する耐性菌は、確認されていない。

### 1. ポリオキシシン剤の耐性菌分布

斑点落葉病のポリオキシシン剤耐性菌は、県内に広く分布している。県中南部で耐性菌率の高い園地が多く、県北部ではやや少ない傾向にある。平成13年の結果でも、県南部で耐性菌率が高く、県北部で低い傾向にある。

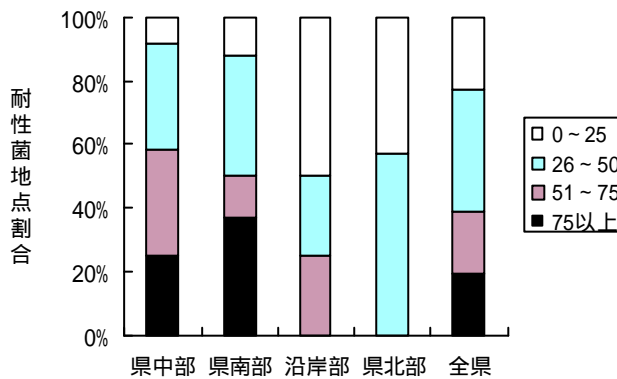


図1 耐性菌の程度別地点割合 (平成11年調査)

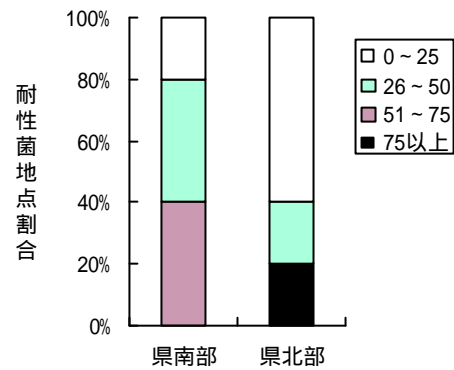


図2 耐性菌の程度別地点割合 (平成13年調査)

### 2. ポリオキシシン剤の休止と耐性菌率

県中南部の園地ではポリオキシシン剤耐性菌の出現のため、ポリオキシシン剤の使用を休止する園地が増えている。休止することにより、耐性菌率は低くなる傾向が見られる。しかし、耐性菌率の低下は園地によって異なり、休止して数年後も一部では耐性菌率の高い園地が散見される。

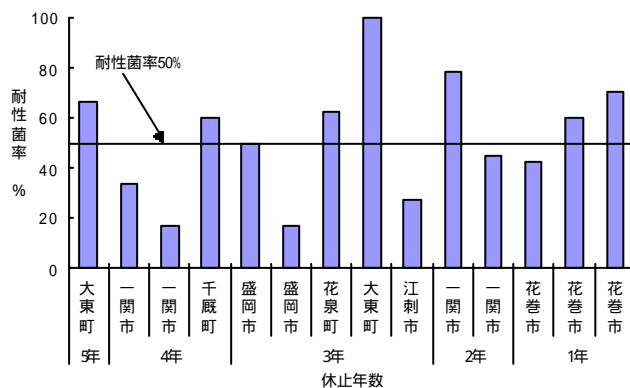


図3 ポリオキシシン剤の休止年数と耐性菌率  
休止年数は、調査前年までをカウント

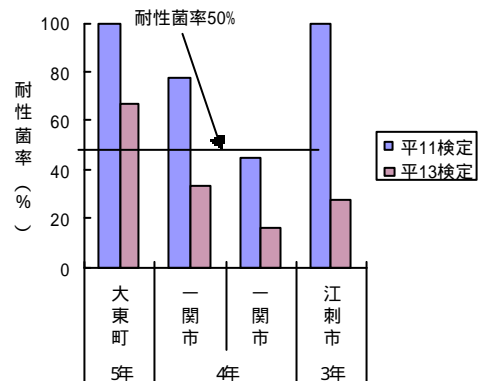


図4 ポリオキシシン剤休止と耐性率の変化 (同じ園地を調査)

### 3. ロブラル剤に対する耐性菌検定

県内各地の園地から、斑点落葉病の罹病葉を採集し、ロブラル剤に対する耐性菌の検定を実施した。ロブラル剤耐性菌は、確認されなかった(表1)。したがって、ほとんどの園地でロブラル剤の使用可能と考えられる。

表1 ロブラル耐性菌検定結果(平成11年調査)

	採集日	検定菌株数	耐性菌株数	耐性菌率
盛岡市	7/23	6	0	0.0%
	7/23	6	0	0.0
石鳥谷町	7/23	6	0	0.0
	7/23	7	0	0.0
花巻市	7/23	9	0	0.0
北上市	7/23	10	0	0.0
胆沢町	7/22	7	0	0.0
江刺市	9/20	11	0	0.0
一関市	6/22	9	0	0.0
	7/12	8	0	0.0
花泉町	6/22	8	0	0.0
二戸市	8/ 5	5	0	0.0
	8/ 5	8	0	0.0
軽米町	8/ 6	6	0	0.0
	8/ 6	7	0	0.0
九戸村	8/ 6	9	0	0.0
	8/ 6	5	0	0.0



図4 斑点落葉病

### 4. 防除対策

過去に耐性菌率が高いためポリオキシシン剤の使用を数年控えた園地でも、いまだ耐性菌率が高い可能性がある。過去に耐性菌率が高かった園地で、再度使用する際は、普及センター等指導機関に相談する。簡易検定で耐性菌率が50%を超える場合は、ポリオキシシン剤の使用を控える。

一般に県北部では耐性菌率が低く、ポリオキシシン剤は使用可能な園地が多い。しかし、耐性菌率は園地により異なるので、ポリオキシシン剤を使用した後も、斑点落葉病が多発する場合は耐性菌の高いことが疑われるので、ポリオキシシン剤の使用を控え他の剤を選択する。

ポリオキシシン剤が使用可能な園地では、他の剤との組み合わせにより連用せず年1回を目安に使用する。

ロブラル剤耐性菌は確認されていないが、連用すると耐性菌が出現するおそれがあるので、ロブラル剤についても年1回の使用を守る。

参考資料：平成7年度指導上の参考事項「りんご斑点落葉病ポリオキシシン耐性菌の県内分布とその簡易検定及び対策」

事業名：発生予察効率化推進事業(斑点落葉病ポリオキシシン耐性菌)